

日本の農業は戦後から現代に至るまで、 どのように変化してきたのか？

農業の戦後史を再検証する、忘れられた基礎資料群を発掘する新シリーズ「資料 戦後日本の農業と地域」、ついに刊行開始！第1弾の『復刻版 日本4H新聞』は、戦後から高度成長期に至る時期に、農業改良・農村の復興と民主化のなかで、若者たちが何を目指し、その生活がどう変化したかを伝える貴重な全国紙である。Head, Heart, Hands, Healthの4つの「H」を掲げた4Hクラブが展開した運動と農村の現実がよみがえる！確認された機関紙『日本4H新聞』に関連資料を併せて復刻。



復刻版 資料 戦後日本の農業と地域 1 日本4H新聞

全3回配本・全10巻・別巻1

戦後農業資料の新たな読解に期待する——
大門正克 横浜国立大学名誉教授

戦後の農村社会の息吹きに触れる——
市田知子 明治大学教授

助け合いがあたりまえだった
時代を知るために——
佐藤 仁 東京大学東洋文化研究所教授

Rural Worlds Regained ——
Will Sack
Ph.D. Candidate in History, Harvard University

Kenichi Yasuoka
安岡健一 解説
大阪大学大学院准教授

復刻版 資料 戦後日本の農業と地域 1

日本4H新聞

全3回配本・全10巻・別巻1

揃定価 ◎ 324,500円 (揃本体 295,000円 + 税 10%)

底本 ◎ 『日本4H新聞』第15号～第707号 (1952年9月4日～1973年3月24日) (日本4H協会 発行)
※第1-14、23-30、38、51、55-57、59-61、63、86-87、112-114、142、197、425、451、499、521-523号は欠号。 ※収録内容は変更となる場合がございます。
『4Hクラブの研究』(日本力行会、1949年) / 『4Hクラブの理念と方式』(永田稔、日本力行会、1949年) ほか、別巻(第3回配本) 収録予定。

体裁 ◎ B4・A4判 (2面付) / 角背上製 / 各約300頁 / 総約3200頁

配本予定 ◎

第1回配本・全3巻 (第8-10巻)	揃定価 89,100円 (揃本体81,000円+税10%)	2024年12月	ISBN978-4-8350-8855-6
第2回配本・全4巻 (第4-7巻)	揃定価118,800円 (揃本体108,000円+税10%)	2025年4月 (予定)	ISBN978-4-8350-8850-1
第3回配本・全4巻 (第1-3巻・別巻)	揃定価116,600円 (揃本体106,000円+税10%)	2025年10月 (予定)	ISBN978-4-8350-8846-4

お薦め先 ◎ 農業史、農村社会学、農業政策、ジェンダー、協同組合史、メディア史、近現代史などの研究者。大学・公共図書館

解説 **安岡健一**
(大阪大学大学院准教授)



創刊100号記念特集の表紙(『日本4H新聞』第100号、1955年10月14日、第1面)。

- 『日本4H新聞』は第245号(1960年1月14日)までは「日本4・H新聞」と表記されているが、本復刻では「日本4H新聞」で統一した。
- 本書の巻構成、収録内容、定価、刊行時期などは変更となる場合がございます。

■資料 戦後日本の農業と地域 (編集代表 安岡健一) シリーズ刊行予定!

戦後から1980年代に至る、農業史と農村地域における変化をとらえるための、「資料 戦後日本の農業と地域」シリーズ刊行開始! 農業政策、メディア、生活運動、協同組合、女性・ジェンダーなどの多様な視点から資料を発掘、復刻する。農業・農村・農政、そして「農」にたずさわるすべての人びとの歴史をとらえ、いまに向き合い、未来を構想する手がかりとするために……。

1 『復刻版 日本4H新聞』全10巻・別巻1	上記	揃定価 324,500円 (揃本体295,000円+税10%)	解説 安岡健一 (大阪大学大学院准教授)
2 『農村と文化・家の光調査資料』(仮)全4巻	2025年9月予定	揃予価 96,800円 (揃本体88,000円+税10%)	解説 坂口正彦 (大阪商業大学准教授)
3 『戦後農政 大引継資料』(仮)全2巻	2026年春予定	揃予価 66,000円 (揃本体60,000円+税10%)	解説 伊藤淳史 (京都大学教授)
4 『史料 戦後改革と農業復興会議』(仮)全8巻	2026年秋予定	揃予価 198,000円 (揃本体180,000円+税10%)	解説 齋藤邦明 (東洋大学准教授)

好評関連資料

◎『復刻版 海の外』全3回配本・全7巻・別巻1 編集 森武磨

揃定価 235,950円 (揃本体 214,500円 + 税 10%)

新刊!

大正期から昭和戦前期(1922-1945)の海外移住の実態、現地社会と日本人とのかわりを伝える貴重雑誌『海の外』を後継誌『信濃開拓時報』とともに復刻! 戦後の4H運動を主導した永田稔が主に編集した本誌は、地方農業と移民を考えるための必見資料である。森武磨による別巻(総目次・索引)附。

第1回配本 (全2巻)	揃定価 66,000円 (揃本体 60,000円 + 税 10%)	2024年 11月新刊!	978-4-8350-8834-1
第2回配本 (全2巻・別巻)	揃定価 70,950円 (揃本体 64,500円 + 税 10%)	2025年 2月予定	978-4-8350-8837-2
第3回配本 (全3巻)	揃定価 99,000円 (揃本体 90,000円 + 税 10%)	2025年 6月予定	978-4-8350-8840-2

◎『占領期報徳運動資料集成』

全3回配本・全10巻 編集・解説 見城悌治・須田将司

揃定価 222,200円 (揃本体 202,000円 + 税 10%)

敗戦直後から占領期終了の1952年まで、主要紙誌『民主報徳』『報徳青年』『報徳』を総目次・索引と併せて収録。「新生日本」において、農村の復興で報徳が果たした役割を明かす、地域史研究の知られざる基礎資料をまとめて集成!

第1回配本 (全3巻)	揃定価 68,200円 (揃本体 62,000円 + 税 10%)	978-4-8350-8405-3
第2回配本 (全3巻)	揃定価 66,000円 (揃本体 60,000円 + 税 10%)	978-4-8350-8409-1
第3回配本 (全4巻)	揃定価 88,000円 (揃本体 80,000円 + 税 10%)	978-4-8350-8413-8

4-H PLEDGE

I pledge
My Head to clearer thinking;
My Heart to greater loyalty;
My Hands to larger service; and
My Health to better living, for
My Club, my Community, and my
Country

不二出版

振替口座 東京都市文京区水道2-10-10
F T 〒112-0005
A E 不二出版
替 X L 0035988167004
0035988167004
15988167004
6988167004
21167004
940054
854

表示価格はすべて税別

写真: 花つくりをする女性 (千葉県鴨川市)。
*パンフレット写真は本復刻及び一般社団法人家の光協会所蔵による。

「資料 戦後日本の農業と地域」シリーズ刊行開始にあたって

編者代表 安岡健一

一九世紀末以後の日本は産業革命を通じて工業を発展させつつも、農家・農村の規模を維持した。農村部への居住者が総人口の半数以下になったのは、二〇世紀半ば高度成長期のことである。このことは、日本の近代史を特徴づける重要な個性であり、戦後という時代こそがその重大な変化の時期であった。

この過程で、農業・農村・農家にはさまざまな社会的役割が託されてきた。敗戦直後には食糧不足、過剰人口といった当時の社会的危機の解決が委ねられ、高度成長期には土地・人・食料を都市に提供した。高度成長期以後も、日本が国際化を遂げるなかで農産物自給は重要な争点であり続けた。しかし戦後八〇年が経過しようとする今、深刻化する人口減少と高齢化の結果、もはや農業後継者の確保の域を越えて、地域社会の持続性そのものが疑問に附されるようになり、食生活の変化にもなう自給率の低下が食糧安保の観点から危機として認識されるようになるなど、新たな局面を迎えている。

一方で、機械化などによる生産性の向上、健康づくりのための努力や都市住民との提携といった、戦前には萌芽的にのみ存在した活動を通じて農村は維持され、戦前から戦後にかけての農村に貧困のイメージは克服された。社会の全体としてみれば、時に逸脱があるにせよ多種多様で新鮮かつ安全な農産物が手に入る状況が実現された。生産の場であると同時に消費の場でもあり、人びとが重層的な人間関係を織りなしてつくりあげてきた生活には、自然と一体化した文化的景観を代表とした、多面的な価値が認められる。また、継承されてきた食文化や都市景観を構成する農の価値も、近年になって評価されるに至った。

二〇一九年にはじまった国連による家族農業の一〇年の提唱は、家族単位・集落単位を中心に続けられてきた日本農業の、持続可能性に寄与する側面を見直す大きな契機であろう。常に問題を抱えながら、しかし現実に向き合った多くの人間による試行錯誤を通じて、今日につながる変化がもたらされた。もちろんそこには、ジェンダー格差など、なお残り続けている問題もある。

農地改革や農業協同組合の設立を筆頭とする、戦後改革以後の日本農業・農村はどのように変化してきたのだろうか。それを理解することは、戦後日本の歴史とは何だったかを理解することと深く結びついているが、いまだ明らかでないことも多い。私たちはここに、農業・農村・農政、そして農にた

戦後農業資料の発掘と新たな読解に期待する

——『資料 戦後日本の農業と地域』シリーズ刊行に寄せて——

大門正克

戦後の一九五〇年代ころまでの日本社会では、今では考えられないほど農業や農村の比重が高く、農業問題は農地改革や生活改善などをめぐって同時代の関心を集めていた。また、一九八〇年代ころまで、農業問題は、歴史研究や現状の研究の重要な課題だったが、日本社会における農業の地位の低下にともない、農業問題に対する関心も小さくなった。そのようなときに、「資料 戦後日本の農業と地域」が刊行されることになり、戦前・戦後の農業問題に関心をもってきた一人として、大きな期待を寄せている。

期待を抱くのは、農業問題の新たな資料の発掘と読解が進む予感からである。本シリーズは今回の『復刻版 日本4日新聞』と農村における読書調査や報告書類、ついで、戦後農政史料として「大臣引継資料」と農業復興会議の資料の刊行が予定されている。いずれも、今までとまって閲覧することの難しかった資料であり、これらの発掘と刊行は、農業問題への新たな関心を呼び起こすのではないかとこの予感を抱いている。

この予感を抱くのは、今回の資料シリーズの編集・解説には、安岡健一氏をはじめ、農業問題を研究する幅広い中堅・若手研究者が加わっており、これらの人による解説では、資料にふさわしい読解の一端を示してもらえないかと期待されるからである。

試みに最初に復刻が予定されている『日本4日新聞』第三二号（一九五三年四月四日）をみてみれば、「農村青年クラブ 第二回実績発表全国大会」が大きく取り上げられており、「三千の聴衆驚かす」「見事な研究成果」「会場に渦巻く新しき農村の息吹き」という見出しのもとで、多くの写真と記事が掲載されている。「初の農家生活改善発表大会は「連日賑わう」とその熱気を伝える一方で、「クラブ活動の現状と隘路」の記事からは、4日活動の困難を読みとることもできよう。写真や表彰には、男性だけでなく女性の姿もあり、未亡人だけの農事研究会の紹介記事もある。日本の4日クラブを「アジア諸国の手本」と述べるアメリカ大使の祝辞や、「4日クラブの国際性」を述べる文章からは、冷戦のもとでの4日クラブの国際的位置づけを考へることもできよう。

このように、『復刻版 日本4日新聞』は、単に史実を発掘して理解するだけでなく、地域や農政のあり方をめぐり、メディアやジェンダー、国際性などに留意して新たに読み解くことが求められている資料であり、それがまた可能な資料だということができる。本シリーズの編者には、これらの読解を進めるのにふさわしい人たちがそろっている。ここでの資料の発掘と読解から、戦後日本社会の新たな歴史像が描き出される可能性もあるだろう。大いに期待を寄せたい。

（おおかどまさかつ・横浜国立大学名誉教授）

ずさわる人びとの歴史を捉え、いまに向き合い、未来を構想する手がかりとなるように、「資料 戦後日本の農業と地域」を刊行する。

本シリーズでは農業・農村の歴史を専門とする研究者が集まり、各テーマを担当する。その第一弾として『復刻版 日本4日新聞』そして『農村と読書』（仮）、『戦後農政 大臣引継資料』（仮）などの刊行を予定している。戦後日本農業の歴史はまだ未検討のことも多く、これから探究されるべき対象である。それゆえ本資料シリーズは、特定の結論を導き出すための資料というより、共に考えるための資料を復刻するものといえる。また、公文書から民間の記録に至るまで、多彩な資料を提示することで多面的な議論が可能となるようにしたい。

残念ながら日本には、農業・農村関係の歴史資料を包括的に保存・活用する機関が存在しない。幾多の資料が、保存場所がないとの理由から廃棄されているが、そこには二度と手に入らないかけがえのないものも含まれている。過去を歴史として捉えていくためには資料が必須である。刊行される本資料シリーズを手にとっていただいた皆さんと協力し、この社会で営々と続けられてきた農をめぐる努力や創意工夫の歩みを受け継ぎ、後世に引き継いでいくことを展望している。本シリーズの発行を、その第一歩としたい。

（やすおかけんいち・大阪大学大学院准教授）



写真：子豚のせり市の様子（宮崎県日向市）。

戦後改革以後の日本農業・農村はどのように変化してきたのだろうか。それを理解することは、戦後日本の歴史とは何だったかを理解することと深く結びついている——



■「農村青年クラブ 第二回実績発表全国大会」での活発な成果発表が掲載された『日本4日新聞』第31号（1953年4月4日）第3面。

『復刻版 日本4H新聞』——復刻にあたって——

安岡健一

『日本4H新聞』は、4Hクラブ活動を支援するためにつくられた民間団体・日本4H協会の機関紙である。4Hクラブは、20世紀初頭のアメリカに源流をもつ、農村の青少年が農業経営・技術の調査研究をはじめとさまざまなプロジェクトに取り組みむクラブである。4Hという名称はHead, Heart, HandsそしてHealthの頭文字に由来する。

日本でもすでに一九二〇年代には4Hクラブを名乗る活動がみられるが、本格的に全国に広がるのは戦後の農業改良普及事業と結びついてからである。農業改良普及は、農地改革を経てなおも食糧不足に直面する日本にとって切実な課題だった。農村の側においても、学びと実践を求める機運が高まっていたことと併せて、青少年クラブが各地に続々と結成されてゆく。有志によるクラブ活動は地域の個性が強いので、国際的な組織をもつ4Hクラブは、それらのあいだでひととき大きな存在感をみせることになったのである。民主化が目指された時代の特徴を反映して、女性のリーダーが少なからずいたことも農業関係団体のなかでは大きな特徴だろう。

4H協会は財界関係者が多く関わったのが特徴といえる。初代会長は日本鋼管の林甚之丞で、林の体調が優れず活動が十全にできないあいだは、松下幸之助が会長代行となり、二代目の会長を継ぐなど長く関わった。このように、著名な経営者たちが農村における青少年教育の支援に積極的に関わり、彼らの発言がたびたび紙面に掲載されている点は農業の産業としての比重が大きかった時代の個性をよく示している。



写真：バイクを入手した女性たち（佐賀県唐津市）。



写真：農協による有線テレビのはじまり（群馬県佐波郡玉村町）。

戦後の農村社会の息吹きに触れる

市田知子

このたび、『日本4H新聞』の復刻版が刊行の運びとなりました。『日本4・H新聞』*は一九五一（昭和二六）年、旬刊の新聞として発行されました。それに先立つ一九四八（昭和二三）年には農業改良助長法のもとで協同農業普及事業が開始され、全国で農業の改良、農民生活の改善とともに農村青少年クラブ活動が進められていました。そして農業改良は農事研究会が、生活の改善は生活改善クラブが、そして農村青少年クラブを担っていたのが4Hクラブでした。『日本4・H新聞』はこれら三つの団体のための「全国弘報紙」として創刊されたのです。

当時、農業や生活に関する情報を入手する手段は、現在とは比べるべくもなく乏しく、都道府県の普及員が開く講習会、勉強会か、せいぜい戦前からあったラジオ、そして『家の光』などに限られていたと思われます。一九五〇年代から六〇年代にかけての記事を読むと、同新聞が農業に関する出来事や報道に加え、新しい農業技術や生活技術に関する情報誌の役割も兼ねていたことがわかります。冷害対策などはもちろん、農業技術では副部門として進められていた養鶏・養豚に関する情報、生活技術では台所の棚の作り方、普段着兼用の作業着の作り方など、現場で大いに役立つことでしょう。4Hクラブと生活改善クラブが合同で料理講習会を開き、4Hクラブの男性が発案したジャムが大好評という記事もあり、農業改良と生活改善が一体となって行われていたことがうかがえます。これらの技術は、やがて訪れる高度経済成長、一九六一（昭和三五）年の農業基本法の農政下における「選択的拡大」のなかでは顧みられなくなりましたが、当時の農村の様子が目に浮かぶ、たいへん興味深いものです。

また、各地の農村青少年や農村婦人の代表が一堂に会する「実績発表全国大会」の記事は必ず一面に掲載されており、文章や写真を通して会場の熱気が伝わってきます。代表に選ばれ、大勢の聴衆を前に発表をした人びとは、さぞや誇らしかったことでしょう。戦後の農村社会の息吹を伝える貴重な資料が歴史研究者、行政や教育の関係者のみならず、多くの方々にも広く読まれ、活用されることを期待します。



写真：船倉島の海女漁（石川県輪島市）。

*本復刻では『日本4H新聞』という表記に統一した。

推薦

4H新聞はこの4H協会の機関紙であって、4Hクラブだけを取り上げているわけではない。地域のクラブ活動には様々な名称があり、農事研究会、生活改善クラブなど、農村に生きた若者たちの実践する多種多様な団体の動きが掲載されている。さらに、誌面は地域活動や4Hクラブの全国組織をめぐる動向を紹介する記事を中心としつつも、当時の農業関係雑誌の転載や、NHK農事部がつくった通信員制度（ラジオ・ファーム・ディレクター＝RFD）の配信する記事も含まれていて、農業・農村関係のトピックにこと欠かない。また4Hクラブは国際的な団体なので、米国からの実習生を受け入れたり、あるいは米国に代表を派遣するなど、戦後の日米民間交流に関する資料でもあるほか、ブラジルへの移民送出にも深く関わったり、アメリカの国際的な農業開発支援事業と結びついていることから、東南アジア諸国とのつながりがみと取れる部分もあり、冷戦という視角からこの時代の農業問題をとらえ返すうえでも貴重な情報源となる。

高度成長期における農村から都市への新規学卒者の移動は4Hクラブに限らず農村での自主活動のあり方を大きく変えて、最終的に協会の活動も持続可能ではなくなる。しかし、現在にもかたちを変えて受け継がれている全国各地の青年たちの学習や実践からは、日本に戦前存在する農村青少年教育と占領期の民主化政策、そして産業界の関係がグローバルな冷戦下に絡まり合いながら社会構造が大きく変わる時代をとらえ直す、新たなヒントを得ることができよう。

（やすおかけい子）

助け合いがあたりまえだった時代を

「総体」として知るために

佐藤 仁

推薦

私は主に発展途上国の開発を研究対象にしてきたが、その延長線で日本が近代化と戦後復興の時代にどのような開発活動を経験したかに関心をもってきた。なかでも注目したのが、戦後の農村における生活改善運動と、働きかけられる側としての農民たちの認識である。共同炊事や共同保育、台所やかまどの改善など、農村のなかでも最も地位の低い「嫁」の目線に焦点をあてて実施された各種の生活改善のアイデアは、現在の途上国にも「カイゼン」と呼ばれて普及しつつある。

ただ、こうした成果の普及だけをみては、とりわけ農村に暮らす日本人が経験してきた挫折や苦悩、試みや喜びなど、生活をよくする活動の総体はわからない。そもそも過去の記録は、「働きかける側」のものも多く残る傾向があるものの、働きかけを受ける一般農民の考えや認識は記録に残りにくい。こうした「総体」としての戦後の開発経験を、この『日本4H新聞』はよく伝えている。

たとえば、この新聞では農村の女性を主な対象とする生活改善事業を進めるにあたって、老人男性の無理解をどのように克服するか、といった悩みが吐露され、それに対する手立てが議論される。こうした当時の農民にとって深刻な話題がある一方で、「4H音頭」の踊り方を図入りで解説した記事もある。そこからは4H運動の陽気さと、コミュニティを基盤に改善運動を動かそうとしていた時代の空気が伝わってくる。米国の4Hクラブからの来訪者の話や、日本の研修員が米国を訪問した様子など、戦後間もない国際交流の記録としても貴重な。また昭和二〇年代には、生計を立てるための実践的な技術や工夫に関する記事が目立つが、昭和四〇年代になると「幸せとは何か」「農業がもたらす安心とは」など、内面的な記述が増えることも、戦後の日本がたどった軌跡を体現しているといえるだろう。さらにおもしろいのは、この新聞の欄外にある広告である。日本の農山漁村をマーケットとして想定した、テレビやバイク、葉など時代の空気を感ぜさせる広告は、この新聞の資料的価値を高めている。

私の研究室には、アジア地域を主な対象に開発援助のあり方を研究する大学院生が多いが、一時間ほどこの新聞を前にすわらせて、戦後日本で実践された「下からの開発」の実相について想像力をふくらませてほしいと考えている。それが現在の日本、そしてさまざまな途上国の暮らしに、どのように結びついているのかを考えてほしいのである。かつてのような貧乏からは抜け出せたものの、孤立や孤独が社会問題になっている現代の日本では、とくに『日本4H新聞』に描かれた助け合いの経験から学ぶべきことが多いはずである。この資料の全貌が復刻されたのは驚異的であり、編者の安岡健一氏はじめ関係者の努力に敬意を表したい。このお宝を生かせるかどうか、それは私たち読者にかかっている。この新聞に込められたアイデアと経験の数々が未来の日本だけでなく、世界各地で農民の暮らしの改善を願っている人びとにも届くことを願っている。

（さとうじん・東京大学東洋文化研究所教授／コロンビア大学客員教授）



写真：馬による耕作の様子（撮影地不詳）。

推薦

Rural Worlds Regained: The Japan 4H Newspaper series

Will Sack

The Japan 4H Newspaper opens a granular yet sweeping vista on the postwar Japanese countryside during a period of rapid change. At the same time, it offers an inside look at the culture and practices of an institution central to many of those changes: 4H.

Although most often associated with state fair pageantry and household crafts in the United States, 4-H was a powerful conduit of state power in rural East Asia. An education program for youth run primarily by Agricultural Extension services, first in the US then in more than eighty countries, the H's in 4-H are "Heads, Hearts, Hands, and Health" — an ambitious statement of what they wanted to transform in children and young adults. 4-H spread around the world because it was also an autonomous program, run overwhelmingly by kids themselves. Even so, public servants in agrarian areas usually spent most of their time and resources on 4-H. It thus allowed a small cohort of experts to dramatically magnify their impact on the countryside by reframing rural development as a series of games and contests for youth. Children's own desire to do well did the disciplining, and rural bureaucrats often gave them access to powerful new scientific methods, ensuring that children could outshine their own parents and neighbors.

This history is global in reach. Counterintuitively, the farther from the US that 4-H went, the larger its role in rural life became. The most powerful 4-H clubs in the post-1945 world were in South Korea, Taiwan, and Japan, where they built on the earlier rural development programs of the Japanese empire. Of these, Japan's 4H was perhaps uniquely influential, circulating new techniques and technologies at home and throughout the

region. Accordingly, these sources not only help researchers understand Japan's rural and agricultural history, but also open a window on the transnational history of postwar East Asia.

These sources offer a glimpse at practices in numerous clubs in the countryside, not just 4-H. During the Occupation of Japan, 4-H Clubs grew rapidly after their founding in 1949. By June 1950, there were more than 14,400 clubs with over 500,000 members: at least one club in almost all of Japan's 8,400 villages. Ostensibly, 4-H was for kids ages 12-20, but finding a club in the archive whose young adults or children fit this age range is very difficult. Some clubs were all men in their 30s; in others, children were all between the age of six and eight. In this and most regards, clubs were free to disregard standard rules (though they would then be less eligible for prizes), so long as they followed a few basic rules. This diversity of club practices resulted from the August 26th 1949 "Basic Policy on the Development of Youth Club Activities in Agriculture, Mountains and Fishing Villages," a joint policy of the Ministry of Agriculture and Forestry and the Ministry of Education. This directive asked rural clubs to practice flexibility and to cooperate. In so doing, it took a complex landscape of clubs and made them mutually porous. Thus, Life Improvement clubs (seikatsu kaizen kurabu), ostensibly for women age twenty to twenty five, were often also 4-H clubs and vice-versa. In documented cases, boys might well want to work on domestic tasks, and do all the Life Improvement activities, but in such instances, they would often (though not at all consistently) be counted as 4-H members and not Life Improvement club members.

Other linked groups included the Future Farmers of Japan, Boy and Girl Scouts of Japan, and Parent Teacher Associations. These organization, but also the Youth Corps (seinendan) or citizens halls (kōminkan) and even Mothers Clubs appear in the records as having shared halls, events, and attendance lists with 4-H. As a result, all these institutions appear in the archive of 4-H itself. This should make these sources of interest to historians working on any number of related topics.

Lastly, the Japan 4H Newspaper was previously only accessible to scholars who visited multiple locations to read it. Thanks to those at Fuji Shuppan, especially Mr. Murakami Yūji, a near-complete run of this newspaper is now widely and conveniently available for researchers — which is a great boon.

—Ph.D. Candidate in History, Harvard University

内容目次

日本4H新聞 第631号 (1971年1月24日)

強い心のつながり

4Hクラブ活動の意識調査

仲間を求めるクラブ員

高知県 高知県

活動内容に工夫が必要

クラブに入会して期待がかなえられたもの

女性 (2525) 男性 (2170)

男性経営への意欲向上
女性農村の改善に期待

七〇年代に意欲
岡山県で体験をもとに討

身回りで十分
結婚前に話し合いを

望ましい結婚とは?

個人に至高の価値
民主主義教育の価値

年取の平均化へ
功徳ももたらす

新婚旅行はぜひ
経費金銭的余裕はムリ

にんにくを栽培
よもぎ栽培も

功徳を表彰

関心とモチベーション

成功の王道を歩む

心頭技

健康飲料 ヤクルト



埼玉県熊谷市成田4Hクラブのプロジェクト発表会の様子(『日本4H新聞』第200号、1958年9月24日、第1面)。

■上、「日本4H新聞」第631号(1971年1月24日)第1面は高知県の「4Hクラブ活動に関する意識調査」報告記事。「青年」を対象とした紙面には、農村の若者を捉えた貴重な記事が多数掲載されている。

■左、「望ましい結婚とは?」(『日本4H新聞』第633号同年2月14日)も高知県からのレポートの続き。「身回りで十分」「新婚旅行はぜひ」など率直な意見が目立つ。